

No.78 contents

- 2 ごあいさつ 〈絵画〉総評
- 3 〈彫刻〉総評
- 4 理事企画コーナー(絵画部)について 二科出品者支援講座
- 5 2022春季二科展「個展ブース」
- 6 〈絵画〉選抜出品者 受賞作品寸評
- 7 〈彫刻〉前年度受賞選抜者作品
- 8 第104回二科展巡回展
- 10 第105回記念二科展巡回展
- 12 第106回二科展巡回展日程(予定)
- 13 支部通信(東北支部連合展/長崎支部・熊本支部合同展)
- 第106回二科展日程表・出品規約QRコード
- 14 第44回定時会員総会 役職一覧
- 15 計報
- 16 第106回二科展 支援講座・ワークショップ・講演会
彫刻部 新企画 事務局だより 編集後記



春季

発行人：生方 純一 発行：公益社団法人 二科会
<https://www.nika.or.jp/> TEL：03-3354-6646



2022
春季 **NIKA**
Painting Sculpture
2022. 4. 19~5. 2 東京都美術館





彫刻部
春季二科展総評
展示空間

新型コロナウイルス感染症の蔓延により、昨年、一昨年開催することが出来なかった春季二科展を東京都美術館で開催することができた。

今回の彫刻部総評として、改めて春季二科展の歴史を振り返ってみたい。

春季二科展は、昭和53年、秋の本展に対し、実験的創造の場を趣旨として、開催され、銀座セントラル美術館、新宿伊勢丹美術館と会場を移し、昭和61年から平成16年まで、銀座松屋で開催してきたのである。

それ以降は相応しい会場が見つからず、開催することができなかつた。

彫刻部にとっては、松屋での開催当初から展示会場の狭さが問題となり、春季二科展廃止論まで出た。出品希望者十数名が小品を持ち寄りという状況での展示であった。展覧会をする意義も、出品規定も曖昧にそのまま継続してきたことが実情であった。平成20年東京都美術館で再開された春

季二科展は彫刻部にとって、やっと獲得できた展示空間であったのである。

彫刻は無限定の三次元の空間に、独立している造形物である。作品に込められた思いを鑑み、今年の展示は、天井が高く白い壁に囲まれ、具象的表現、抽象的表現を問わず、素材としての実態が多様な言葉が発していた。また、床に直接展示された台座のない作品が周りの空間を引き締める効果を発揮し、会場全体に心地よいリズムを作っていた。しかし空間を支配すべき量塊の物足りなさを実感したことも否めない。

彫刻にとって、素材は不可分の関係にあるが、より的確に自己のイメージを具現化するには、技術の練磨が強く求められる。しかしながら、素材の持つ魅力の一面だけを、手慣れた技術だけで、うまくまとめた作品も見られたということに、小品制作の難しさを自照と共に実感したことも事実である。

作品には完成がなく結果だけがある。

吉野 毅

いぶらけ

田中 良

新緑の香あふれる上野東都美術館で、春季二科展を開催いたしました。コロナ禍でやむなく2020・2021年の2回にわたり開催延期がありましたが、開催できました今年度は、会場も会期も拡大して活気ある陳列となり充実した内容となりました。反省点もあるかと思いますが、今後にご期待いただきたいと思います。

私事ではありますが、この度、永年務めさせていただいた理事長を退任させていただきます。

私を支えていただきました役員の皆様、事務局長をはじめスタッフの皆様、会員・会友の皆様、そして多くのご支援・ご協力をいただきました皆様方に心から御礼申し上げます。

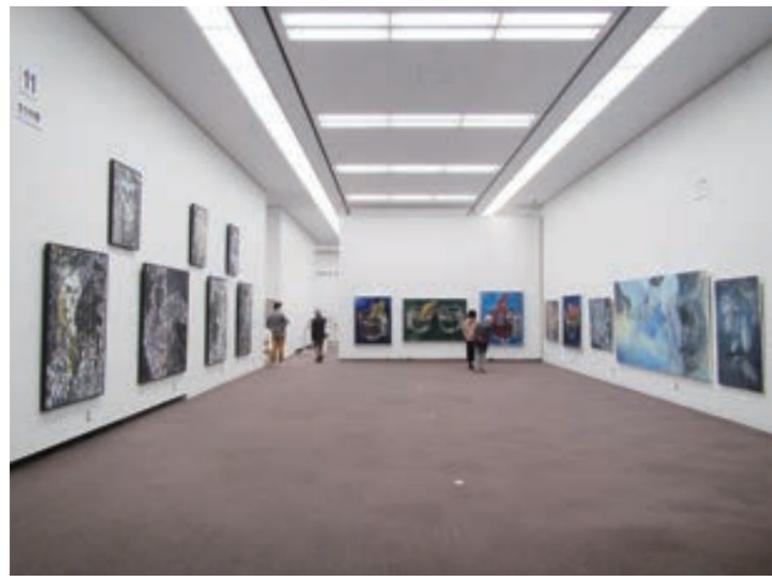
どうぞ今後も新体制で、潑刺とした二科会を続けていきたいと思います。念じております。



4月19日 授賞式 展示2室



受賞者ギャラリートーク 左：小南治次さん 右：山浦はるみさん



5つの個 企画展示室

2022年4月19日(火) 5月2日(月) 東京都美術館1F第1・2・3展示室において、コロナ禍により3年ぶりの展覧会を開催した。絵画部会員148名(理事14名、監事2名、評議員19名、会員113名) 選抜出品者56名(会友28名、一般28名) 個展ブース5名、計

209名の参加者があった。今回から会場の増床と会期の延長がなされ、一段とスケールの大きさが感じられた。壁面の拡大で作品間のスペースが広がり、ゆとりある展示ができた。会期も2倍となり、観覧期間の自由選択も広がった。

「春季展には実験的な創造作品を」と叫ばれてきたが、歴史的なしがらみで、なかなか実行できなかった。増床・増期間を機に理事会や企画展示委員会等で話し合いを重ね、新しい試みを考案し実現した。

①理事によるフリースペース(ひとつ踏み込んだ試みコーナー)
 タブローでない自由な発想で楽しさの滲む作品をモットーとし、自由な形状(シエープトキヤンバス)、組作品、自由な素材で表現する。

②個展ブース(ひとり10メートル幅で自選した作品を自由に展示)
 集団個展により個性的な発想・創作活動の違いや面白さを助長する。

③作者のコメントの掲示

増床と増期間の契機に、会員や関係者の尽力もあって、今までにない素晴らしい春季展が開催できた。企画展示委員の反省会では問題点や要望がたくさん出た。事前の話し合いを充実させ、会員諸氏から意見を募り、アンケート集約等実施してより良い春季二科展が開催されることを祈念して筆をおく。

絵画部

2022春季二科展総評

香川 猛



209名の参加者があった。今回から会場の増床と会期の延長がなされ、一段とスケールの大きさが感じられた。壁面の拡大で作品間のスペースが広がり、ゆとりある展示ができた。会期も2倍となり、観覧期間の自由選択も広がった。

「春季展には実験的な創造作品を」と叫ばれてきたが、歴史的なしがらみで、なかなか実行できなかった。増床・増期間を機に理事会や企画展示委員会等で話し合いを重ね、新しい試みを考案し実現した。

①理事によるフリースペース(ひとつ踏み込んだ試みコーナー)
 タブローでない自由な発想で楽しさの滲む作品をモットーとし、自由な形状(シエープトキヤンバス)、組作品、自由な素材で表現する。

②個展ブース(ひとり10メートル幅で自選した作品を自由に展示)
 集団個展により個性的な発想・創作活動の違いや面白さを助長する。

③作者のコメントの掲示

作画意図や制作活動の感想等、鑑賞者の興味や理解に繋げる。

①の理事による率先した新しい試みは素材や表現の工夫の魅力を提供し発信できたと思う。②は5名の選抜者が個性豊かな力作の数々を展示し、圧倒的な迫力で感動を与えていた。未来の二科に明るい兆しと希望を与えてくれた。その会場で行われたトーク&ディスカッションは多数の参加者の忌憚のない発言と人間味あふれる答弁が活発に行われ、芸術活動に有意義な方向性を与えた。③のコメントは立ち止まって読んでいる観客もあつたが不揃いな点が惜しかった。

2022春季二科展 彫刻部 前年度受賞選抜者作品



澤田 志功 「天ノ川のメヌエット」



萩野 弘一 「電車ごっこ(思い出)」



稲葉 朗 「Gakehalf」



玉田 真理 「ねむたいや」



長谷川 聡 「水のイメージ」



川口 三千雄 「プラネット」



齋藤 玲奈 「かどで」



平良 光子 「部屋の中のふたり」



増田 麻由 「in the flower base」

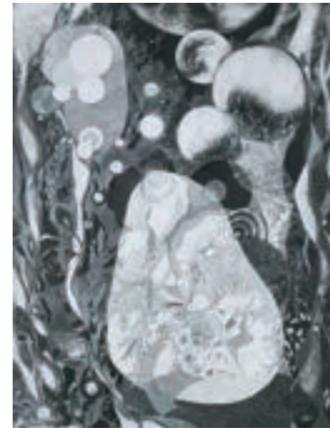


重清 美咲 「ねんねこ」



佐藤 しず子 「お~~~~~お」

絵画部 選抜出品者 受賞作品



出月 智子 「La vie 7」 F80



加藤 弘子 「忘れられた時」 F130

受賞作品寸評

2022年4月17日午前、作品展示を行った。選抜作家の作品は、1室から3室まで56点(80号から130号)。展示終了後、出席した会員により賞を決定するための記名投票を行い、午後会場の事務室で理事による開票、集計を行い、投票数

木戸征郎

順に5名の受賞者を決定した。選抜者の作品は、どれも、工夫と努力が感じられる力作揃いであったと思う。(彫刻も同様) 二科会が益々発展する兆しを感じるすばらしい春季展であったと思う。

■春季二科賞 加藤弘子
今では既に廃墟化している煉瓦造りの建物を懐かしみ、過去を振り返る時、いろいろな思い出が浮かんでくる。建物の中には、きれいなバラの花だろうか、部屋いっぱい描かれて、建物に対し、作者の感謝の気持ちが表現されているように感じられる。青を主調色とし、グラデーションがきれいで、曲面が見事で、雰囲気は大事にしたすばらしい良い作品である。作者の優しさが伝わってくる。

■春季賞 出月智子
いろいろな大きさのペンをうまく使い分け、曲線・曲面を画面いっぱいに取り入れて、全体的な構成、変換等を大事にしつつ、部分的には、かなりの技術と時間を要していると思われる。それだけの効果は充分生かされていると思う。これからの変化と発展が期待される良い作品である。



河野 眸 「刻」 F130



山浦 はるみ 「2022・春を待つ」 F130



小南 治次 「みずべ'22」 F130

■春季賞 山浦はるみ
薄暗い中に、強く逞しく生きていく二本の樹木が描かれている。その木に寄り添うように数羽の鳩が丁寧に描かれている。その鳩は、不安そうな表情であるが、目はしっかりと何かを見つめているようだ。これは、現在の世界の不安な状況が描かれているように感じられる。平和な世界が、一日でも早く訪れることを願った作者の心が表現された、説得力のある素晴らしい作品であると思う。

■春季賞 河野眸
単純化されたフォルム、色あい・マチエール等をはじめ、空間の処理など、見事なものであると思う。特に、レザークロスのような物に、釘のような物で穴を開け、そこに紐が通されている。これがほど良い緊張感を与えている。又、数箇所に刻んだ跡も見受けられ、ダイナミックで斬新な、インパクトのある半立体の作品となっている。今後の作品が楽しみである。

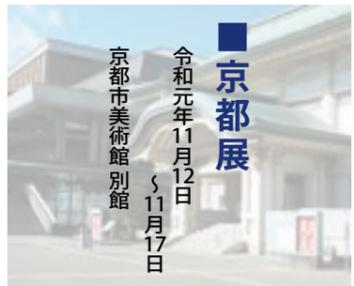
■春季賞 小南治次
池のさざ波に映る風景を見事に捉えて、抽象的感覚をうまく取り入れて、リズムカルで、洗練された見事な作品を生み出している。画面構成が特にすばらしい。使用されている色数は少ないにもかかわらず、多くの色を感じさせる力のある作品で、とても爽やかな洒落た現代的な素晴らしい作品となっている。



京都市美術館別館での開催3年目を迎え、令和2年4月京都市美術館本館のオープンとなることから、最後の別館での開催となりました。



105回展は改装なった本館での開催となります。皆さんの力作を期待しています。(黒川彰夫)

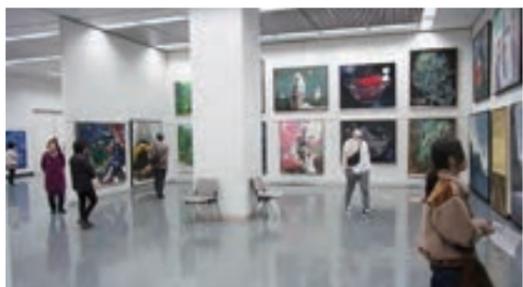


い空間の中に各部門の作品が展示され、別館ながら良い会場効果が生まれたと思います。デザイン部、写真部は限られたスペースで3年間我慢をして頂きましたが、次回は本館で少し広くなった場所で素晴らしい展示を期待しています。



第104回二科東海展は、2019年12月でした。例年なら10月に最初の巡回展として、名古屋で開催されていましたが、あいちトリエンナーレの関係で年末でした。

この年は嬉しいことに東海地区の受賞者が多く、絵画はパリア賞、会員推挙、会友推挙、会員賞、会友賞、特選。彫刻も会員賞、会友賞、各1名ずつと、元気な年でした。



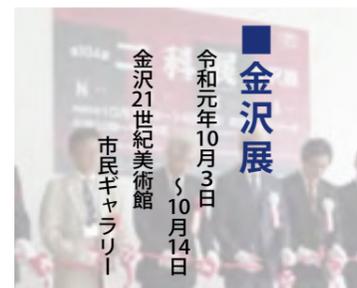
広島では正月開催が恒例の二科巡回展、今年も第104回二科展広島巡回展(第64回広島展)が1月14日スタートを切った。



中原理事には、昨年に続き「自分らしい作品づくり」をテーマにした支援講座を、翌日も支部同人の作品講評にもしっかりと時間を割いて頂き大変お世話になりました。



来場者や各部同人にも概ね好評、各部の皆様、ご協力ありがとうございました。(高松良幸)



第104回二科展金沢展(二科会・北國新聞社・石川県芸術文化協会主催)は、金沢21世紀美術館市民ギャラリーA会場で絵画・彫刻・デザイン・写真の4部門の作品、196点が美の空間を演出しました。

大阪巡回展は2019年10月30日より11月10日まで、天王寺にある大阪市立美術館で開催しました。絵画211点(全国巡回作品全116点、関西及び京滋の大作会員12点、物故会員1点、会友26点、一般56点、彫刻15点(会員12点、会友2点、一般1点)、デザイン195点、写真215点の総出品点数636点の展示です。



年々有料入場率が増えていることから、恒例の催事として地域から関心を集めつつあることを感じました。ただ、少子高齢化による出品者数の減少、来場者数の伸び悩みは、例外なく我々にとっても最大の課題となっています。



高松良幸



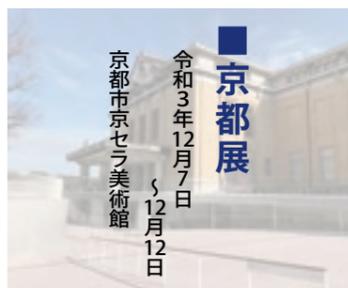
二科展富山展は、コロナ感染症の状況を気かけながら準備を進めました。富山では幸い感染者が減少傾向となり、来賓の方々を迎えて開会式を行うことができました。開会式は、私達にとり色々な面で二科展をアピールする機会です。二科会からは、香川常務理事に出席していただき、先生の丁寧な中にユーモアのあ



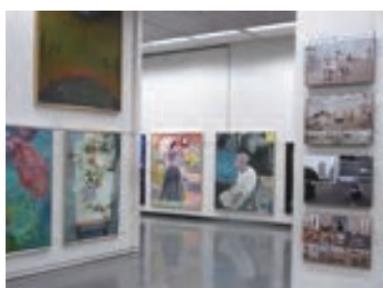
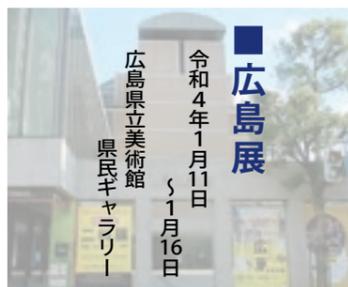
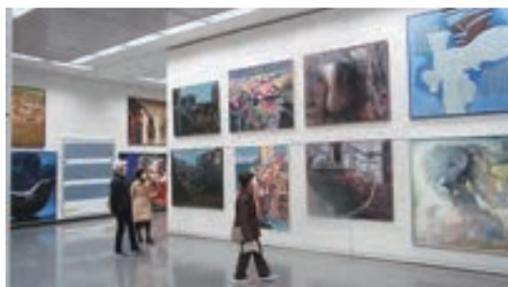
る解説をお聞きすることができました。会場は、富山市民プラザは、複合施設のため決して十分な空間ではありませんが、4部門で306点(絵画96 彫刻6 デザイン32 写真172)をできるだけだけ会場の特徴を生かすように展示しました。しかし、一点でも多くをとの思いから少々窮屈な壁面となりました。今回は、富山支部として初めての巡回展です。少ないメンバーで心配しましたが、会場でのコロナ対策をしっかりととりながら、全員で助けあい協力して無事最終日を迎えることができました。来場者からの「久しぶりに見応えのある展覧会だった」、「多様な作品に触れて充実した時を過ごすことができた」など好意的な言葉を聞くことができました。支部員にとっては、心地良い疲れと共に今後の支部活動に繋がる巡回展となりました。最後に、コロナ禍の中でしたが来場して下さった多くの皆様、そして、今回も二科展を主催して下さった富山テレビ放送様に心より感謝して富山展の報告とします。(柳田邦男)



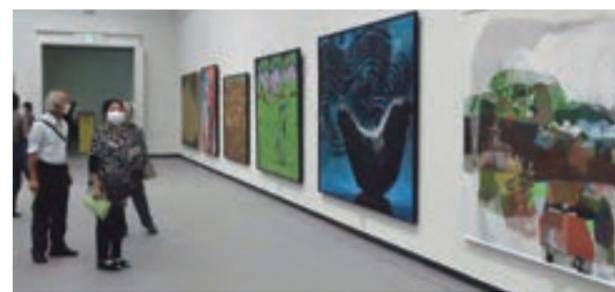
今回の京都巡回展は、昨年コロナの影響で順延となりましたので、京都市京セラ美術館が改装されて久しぶりに本館での展示となりました。4部門の展示総数は279点で、絵画部125点、彫刻部12点、デザイン部62点、写真部82点



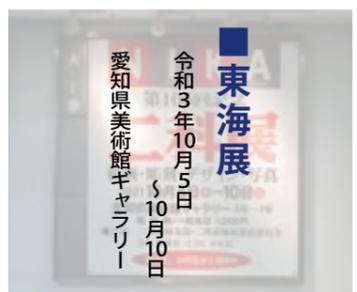
の作品が並びました。絵画部は、全国巡回の会員、受賞者、関西支部会員、京滋の会員、会友、一般の作品125点(全国巡回58点、地元67点)、彫刻部は12点(全国巡回6点、地元6点)の作品が展示されました。前回まで別館での開催のため全国巡回作品を多く展示できませんでした。今回はなるべく多く展示したく、近年の会員推挙の方の作品も展示いたしました。改修された本館もそれほど広くなく少し窮屈な展示でしたが、彫刻との融合展示も外光の入る本館ならではの落ち着いた空間で、作品を鑑賞することができたように思います。絵画部の京滋関係受賞者は東京都知事賞に石橋国夫、会友賞に木村信子、第105回記念賞に橋本則子、会友推挙に島崎紗椰、小南治次、野田喜美代の各氏が受賞されました。ギャラリートーク、ギャラリーコンサート等のイベントは自粛いたしました。が、天候に恵まれ多くの来場者があり、入場者総数3,811人を数えました。コロナの影響がまだ心配な中、盛況のうちに終了いたしました。(入佐美南子)



広島では正月開催が恒例の二科巡回展、コロナ禍で開催が危ぶまれる中、関係者や支部員ご協力を得て、第105回二科展(第65回広島巡回展)は1月11日スタートを切る事が出来ました。今年の出展数は巡回作品に地元192点を加えた4部門535点の展示、来場者は蔓延防止の影響もあり、例年の3割弱の来場者でした。今回の開催については、支部員、後援先にも大変ご心配を頂きましたが、無事巡回展が終了出来ましたこと、感謝申し上げます。又、今回の巡回展は続ける事の大切さを改めて考えさせられた展覧会だったことをご報告させて頂きます。来場者や各部の皆様、ご協力ありがとうございました。(高松良幸)



新型コロナウイルス感染症の猛威が長期にわたり、美術館ギャラリーでも中止している展覧会もある状況で、不安を抱えながら、105回展の準備をしました。東海展は、コロナ禍の中



2年ぶりの開催でした。恒例になつていた、共催各社への挨拶も郵送で行いました。出品者総会、ティーブカット、懇親パーティーや会員色紙の抽選会も中止、金曜日の夜間も閉館としました。今までは、会場に多くの出品者や鑑賞者で、とても賑やかな二科展でした。今回は、密にならないように、会員、会友の当番や、ギャラリーの閉鎖も、案内係に一任しました。出品者全員での展示作業には、2週間前からの検温チェック表の提出、感染拡大防止対策として、受付に消毒液や大きな検温器の設置、初めてづくしの作業など、出品者の工夫と協力がありました。会期は6日間で、入場者は4,746人と少なめでしたが、外出を控えているこの時期に、当日券が250枚も出たことは、地元の二科ファンに感謝します。愛知県美術館を全館使用した恵まれたスペースで、A/E室には、絵画作品を191点、G室の彫刻は、デザインとの融合展示で、15点、F、G室はデザイン作品158点、H、I室の写真是242点を展示、総展示数は、4部で606点でした。絵画部は、初入選者が10代の学生を含めて10人、会員推挙に82歳、会友推挙には87歳と、幅広い出品者層でした。彫刻部は、三重県から23歳の初入選者があり、昨年に続いて若い世代が増えたことは、東海支部にも大きな喜びでした。絵画部には、出品者の減少という課題を残した展覧会でしたが、106回展にはこの課題を解決して、より活気のある展覧会にしたいと思えます。(三後勝弘)



大阪巡回展は2021年10月26日より11月7日まで、天王寺の大阪市立美術館で開催しました。絵画207点(全国巡回作品108点、関西及び京滋の会員大作10点、会友23点、一般66点)、



彫刻11点(会員9点、会友2点)、デザイン178点、写真222点の総数618点の展示となりました。コロナ第五波の感染者の減少傾向がある中で開催でしたが、やはりマスクに三密回避といった感染予防を徹底した緊張感のある展覧会となりました。総入場者は14,278人と一昨年(15,827人)と比べ減少はありましたが、コロナ禍の中での開催としてはまずまずの入場者であったように感じました。特に絵画部では、今回13名の地元同志たちの受賞、推挙を得ることができたことが開催への大きな励みになりました。地元で親しまれてきた大阪巡回展ではありますが、大阪市立美術館の改修工事のため、来年度からしばらくは兵庫県の尼崎市総合文化センターへと会場を移すこととなります。会場アクセスをはじめ、展示スペースによる展示制約など第106回に向けての課題が沸き上がって参ります。場所が兵庫県に変わることになりませんが、これまで以上に地元関西に愛される展覧会になるよう頑張ってお参りたいと思っております。(高畑彰)

支部通信

隣接地区の合同展、本部支援などの報告です。



第2回 二科長崎支部・熊本支部合同展

令和3年12月14日～19日 長崎県美術館県民ギャラリー

令和3年12月14日(火)～19日(日)に長崎県美術館県民ギャラリーB、C室で、第2回二科長崎支部・熊本支部合同展を行うことができました。1年早い時期を予定していましたが、コロナ禍ということで延期しました。今回も会期の1ヶ月前まで実施か、再延期か悩みましたが、無事に実施することができました。

第2回ということもあって、搬入では支部を越えて出品者同士で「お元気でしたか」や「作品制作は順調でしたか」といった互いを気遣う言葉が聞かれ、温かな雰囲気の中で展示作業を進めることができました。顔見知りも増え、互いの制作状況や作品について情報交換する姿も見られました。具象作品が多く、筆数を惜しまない熱のある熊本支部の作品と定めたテーマを追い求めて止まない長崎支部の作品が混ざり合い、互いの刺激になる有意義な合同展となりました。

また、実験的な試みとして複数の作品で自分の展示空間をつくることも有志で行いました。入口近くのA室では、故 坂口昭美会友の遺作展も行い、会場の全室で二科会の挑戦を止めない姿勢を表現できたのではないかと感じています。

令和4年7月には、この会場で第73回二科西人社美術展を予定しています。

(長崎支部 山口 博司)

第6回 二科東北支部連合展を終えて

二科東北支部連合 代表 及川 英之

第6回二科東北支部連合展は、令和4年5月27日～6月1日まで、せんだいメディアテークで3年ぶりに開催いたしました。

混迷の時にこそ美術の力で今できることをしていこうと、絵画73点、彫刻14点、合計87点の展示をして、表現材料も含め、創造力に富んだ、個性あふれる多様な作品が集まり、充実した作品展になりました。来場者は例年の半数で1,052名でした。

今年の大きな企画としては、連合展初日の午前中に「国立新美術館で輝くにはPart2」と題して、中原常務理事に講座・ワークショップを開催していただきました。受講者は、東北地方はもとより、関東からも集まり、定員30名が熱心に心と耳を傾けていました。「目から鱗の心境でした」「色彩や構成の重要性を感じました」「今の時代を感じさせるものを描くことの大切さを知りました」「視点を変えることで驚きと感動を覚えました」等々、非常に大きな学びになったと感想が寄せられました。

午後には生方理事長、支援理事の中原、埴、前田各先生に、賛助出品作品の解説と出品者個々に展示作品をご指導いただき、参加者一同、第106回二科展への思いを新たにしました。

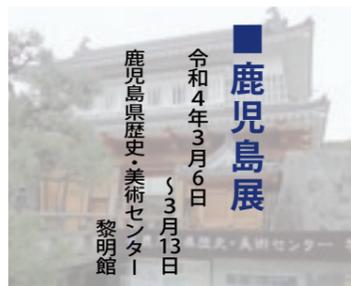


河北新報 2022年5月29日

第106回二科展 日程表

- 8月
 - 25日(木) 搬入業者・個人
 - 26日(金) 搬入個人(16時まで)
 - 27日(土) 30日(火) 審査
 - 31日(水) 入落通知発送
- 9月
 - 2日(金) 3日(土) 業者選外作品搬出
 - 4日(日) 選外作品搬出(彫刻)
 - 5日(月) 6日(火) 個人選外作品搬出
 - 6日(火) 展示日
 - 7日(水) 展覧会初日
 - 授賞式14時
 - 9日(金) 支援講座・ワークショップ
 - 13日(火) 休館日
 - 16日(金) 講演会
 - 19日(月) 展覧会最終日
 - 14時まで
 - 20日(火) 搬出(絵画・彫刻)
 - 21日(水) 搬出(絵画)

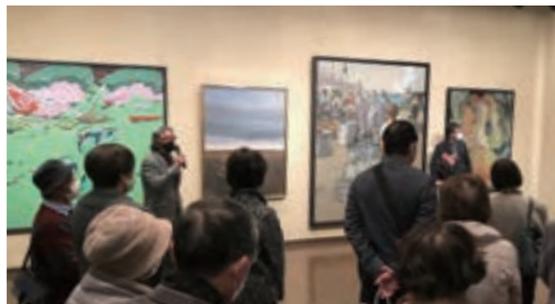
一般の出品規約は下記のQRコードからダウンロードできます



「春を呼ぶ美術展・二科展」として、地元作家の作品を含め絵画123点、彫刻8点、デザイン99点、写真91点が展示され、二科展鹿児島巡回展が2年ぶりに開催されました。未だ収束の見えないコロナ禍ですが、初日から多くの美術ファンが訪れ、これまでの自粛による落ち込んだ雰囲気も覆すかのように賑わい、7日間という短い会期であったにもかかわらず、入場者は2,167人と第103回二科展鹿児島巡回展に近い入場者数となり、我々支部同人の励みになりました。



場の一角には、例年恒例になっている会員・会友を中心とした小作品のチャリティ販売が行われ、作品の売上の一部はユニセフのウクライナ支援として寄付させていただきました。来年度は新型コロナウイルスの流行も落ち着き今までのような開催になっていることを願いつつ、さらに充実した展覧会となるよう今回の課題を整理し、次回につなげたいと思います。(野平 智広)



福岡県立美術館で開催を予定し準備を進めていた第104回二科展(福岡巡回展)が、新型コロナウイルス感染症拡大による、突如の美術館休館のため、中止になったことは、いまでも強烈な印象として心に刻まれています。今回の福岡



巡回展は前回(103回)から数えると3年ぶりの開催となりました。コロナ禍で例年より少なくなりましたが、2,637人の方に御来場いただきました。今回から各部の構成が変わりデザイン部・写真部はゆとりのある展示空間となり、彫刻部は本展での展示風景を掲示するだけでなく、今回はじめてDVDによる動画での紹介も行いました。絵画部は、前回より展示面積が狭くなったのですが、壁面を工夫し例年と同じ内容を確保しました。



当巡回展のみの西日本新聞社賞を選考し表彰を行いました。例年開催のギャラリー1クは、会員・会友を中心に出品作家自身による作品解説を行い、観覧者からの質問も多く出て、楽しいふれあいの時間となりました。西日本新聞・有明新報紙上に、寺崎陽子、牟田志津子、塚本和美、鷹尾重徳の4氏の作品が掲載され、またテレビ西日本のニュース等でも展覧会の様子が紹介され、会友賞を受賞した猪立山三鈴の作品紹介・インタビュー等も放映されました。(田浦 哲也)

第106回二科展 巡回展日程(予定)

- ◆大阪展
 - 尼崎市総合文化センター
 - 令和4年11月3日(木)
 - 11月13日(日)
- ◆東海展
 - 愛知県美術館ギャラリー
 - 令和4年12月21日(水)
 - 12月25日(日)
- ◆京都展
 - 京都市京セラ美術館
 - 令和5年1月24日(火)
 - 1月29日(日)
- ◆広島展
 - 広島県立美術館
 - 令和5年2月7日(火)
 - 2月12日(日)
- ◆鹿児島展
 - 鹿児島県歴史・美術センター
 - 令和5年3月5日(日)
 - 3月12日(日)
- ◆福岡展
 - 福岡市美術館
 - 令和5年3月14日(火)
 - 3月19日(日)

第四十四回 定時会員総会

令和4年5月21日 午後2時〜3時
東京都美術館 講堂
会員総数235名 出席会員83名
委任状出席110名により今総会の成立。

- 出席理事 田中 良 香川 猛 中原史雄 生方純一 菅原二郎 吉野 毅 山中宣明 黒川彰夫 中島敏明 塙 珠世 田浦哲也 木戸征郎 尾崎 功 横前秀幸 島田統一 登坂秀雄 小田信夫
- 出席監事 野村みそら 田川絵理 前田耕成
- 立会人 小林栄子顧問税理士

議事に先立ち、伊庭名管理事・松室常務理事のご逝去に伴い黙祷を捧げた。



田中理事長を議長に、議長の指名で議事録署名人に香川常務理事、菅原常務理事を選任した。

- 第1号議案 令和3年度事業報告 吉野常務理事より、報告が行われ、承認された。
- 第2号議案 令和3年度決算承認の件・財務諸表 同決算に関する監査報告 生方常務理事より説明があり、次いで野村監事より監査報告が行われ、可決承認された。
- 第3号議案 令和4年度事業計画書報告 吉野常務理事より、報告が行われ、承認された。
- 第4号議案 令和4年度正味財産増減予算書報告 生方常務理事より、令和4年度収支予算案、資金調達及び設備投資の見込みがない事などの説明、報告が行われ、承認された。
- 第5号議案 任期満了に伴う役員選任の件 吉野常務理事より、一括選挙の結果を基に令和4年4月18日の理事会で承認された新役員候補が一人ずつ紹介された。会員数の過半数により信任を得て、可決承認された。

2022春季二科展の展覧会報告

香川常務理事より展覧会報告、生方常務理事より経費の報告がなされた。

新選挙制度による役員・運営委員選出を終えて

今年度の役員選挙は、選挙制度改革委員による改革案が昨年の総会で承認され、従来の信任投票・意向投票から初めての直接選挙ともいえる役員・運営委員一括選挙として実施された。4月6日10時

得て、可決承認された。

また、同理事会において承認された絵画部9名、彫刻部3名の運営委員が紹介され、田中理事長が名誉理事長に、香川常務理事が名誉理事となること、川内参与が名誉理事に就任することが報告された。

新選挙制度による役員・運営委員選出を終えて

今年度の役員選挙は、選挙制度改革委員による改革案が昨年の総会で承認され、従来の信任投票・意向投票から初めての直接選挙ともいえる役員・運営委員一括選挙として実施された。4月6日10時

松室重親氏のご逝去を悼む

松室先生は令和四年四月二十五日、九十五歳で永眠されました。二科会の常務理事として正論を旨とした発言が多く、何時も啓発されてきました。また、東京支部の初代支部長として猛者が多く主義主張の分かれる初期の難しい時代の支部をよくまとめられました。

先輩、伊庭新太郎さんを悼む

昨年9月、二科展の審査から帰ったけれど、コロナの状況で見舞をためらうなか、嘉子夫人から亡くなったと連絡、すぐにお宅へ向かった。

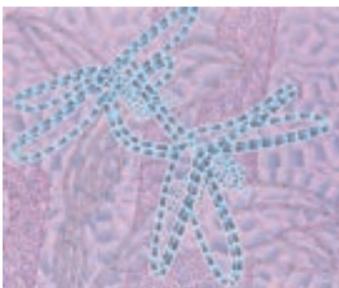


松室重親氏



- 二〇二二年九月二十七日逝去 享年85歳
- 略歴 一九六一年 第46回展特選 一九六二年 第47回展バリ賞 一九六四年 第49回展会友推挙 一九六五年 第50回展 50周年協賛賞 一九六七年 第52回展金賞 一九六八年 第53回展会員推挙 一九七四年 第59回展 会員努力賞 一九八八年 第73回展 内閣総理大臣賞

蜻蛉 F130 第104回展出品作



父上の伝治郎先生とともに、二科会の重鎮として存在感を示した。また、二代に渡って美術大学や自宅のアトリエで、後進を育て、その多くが、いま作家として活躍している。

私も、大学受験で、北向きの大きな窓のあるアトリエに通い、デッサンをした。その体験が、描くことの原点だと思っている。

伊庭さんは、表現を大きく変化させながら続けられたが、数年前に病を得て入院を繰り返すことになった。昨年の4月、最後の個展の案内状に「ここ数年昆虫交尾姿勢に魅惑され、モザイク風な方法論で制作しているが、どのつまりは、独創性と「イノチ」の表現であった。色彩や形態について、細細と云うことあるが、所詮独創性や「イノチ」に帰してしまう。まだまだここに命が有る限り、この不可思議な生命と云うものは、永遠なテーマであるでしょう。」と書いている。個々の作品から、こだわり続けたそのテーマを読み取ることが出来る。

恐らく、本人もこんなに早く、世を去ると思わなかっただろう。次に表現をどう展開させたか見たかった。残念だ、無念としか言えない。謹んで哀悼を捧げたい。

より二科会事務所に開票作業を行い、選挙管理委員が開票作業補助会員の前で封を開け、中を確認、読み上げ係・票数確認係と作業分担し、慎重に開票が行われた。

結果は、総会資料にある通りである。当初新制度のもと想定外の結果が出る可能性もあるかとも何があっても対応出来るよう準備をして来たつもりである。結果今までの役員(理事)4名が定年により退かれ、また役員・評議員数名が被選挙権を辞退されたこともあり、その分スライドして選出された様相を示した。

選出された新役員・新運営委員を辞退された方もなく、更に先日の総会で新役員も承認され、新しい選挙制度となった役員・運営委員一括選挙は、無事船出することが出来た。新役員・新運営委員に就任された先生方のご活躍を願っています。

松室重親氏のご逝去を悼む

松室先生は令和四年四月二十五日、九十五歳で永眠されました。二科会の常務理事として正論を旨とした発言が多く、何時も啓発されてきました。また、東京支部の初代支部長として猛者が多く主義主張の分かれる初期の難しい時代の支部をよくまとめられました。

松室重親氏



- 二〇二三年四月二十五日逝去 享年94歳
- 略歴 一九五八年 第43回展初入選 一九六七年 第52回展特選 一九七〇年 第55回展会友推挙 一九七二年 第57回展会員推挙 二〇〇二年 第87回展会員賞



象 F120 第104回展出品作

私たちが(バイフォー)の若輩とも気軽に付き合い合っていたが、展覧会場や酒席などでも、絵画論や人生訓を拝聴することが多く、有難きものでした。

また、私は写生などにも何度か一緒にさせていただきました。私の運転で山梨支部展に合わせて、甲府市、北杜市、松本市などへ行き、一面の桃畑や新緑の唐松林など、また新潟の湯沢などにも、現場主義の先生はバスターで時間をかけて丁寧にお描きになっていました。

ゴルフにも何度か一緒にさせていただきましたが、先生はルールの細かいことはどうでもいい、楽しむゴルフでした。その後の温泉と癒しの一杯が楽しかったです。ご冥福を。

二石 綱夫氏



- 二〇二三年六月二十一日逝去 享年82歳
- 略歴 一九六八年 第53回展初入選 一九七四年 第59回展特選 一九八一年 第66回展会友推挙 一九八八年 第73回展会友賞 一九九四年 第79回展会員推挙 二〇〇七年 第92回展会員賞



森(再生) S100 第105回記念展出品作

第106回二科展 支援講座・ワークショップ

◎生方純一理事長が語る 「二科・昨日、今日、明日、そしてその先」

◎中原史雄支援講座

ワークショップ 自分の「殻」を破り「描く」を10倍楽しくするために

日時：9月9日(金)

午後1時より

場所：国立新美術館 講堂

応募：参加ご希望の方は左のQRコードを読み込んで応募申込書を入力し、FAXまたはメールで送信して下さい。

定員：70名(先着順) nika@nika.or.jp

参加費：3,000円

応募申込書は

こちらから↓



講演会

◎木下 亮氏 昭和女子大学特任教授

「写実を超えて」

～スペイン・レアリズム

絵画との接点～

日時：9月16日(金)

午後2時～3時30分

場所：国立新美術館 講堂

定員：70名(先着順)

詳しくは

こちらから↓



彫刻部 新企画

二科会彫刻部では、新たなカテゴリーの募集を始めます。30cm×30cm×30cmの立方体に収まる作品を募集します。立体作品の小品というのは、そのサイズにしかない魅力があり、また小品を中心に作品を作っている作家も少なくありません。一般の出品者だけではなく、会友、会員も出品できます。作品はステンレス台座(35cm×35cm×高さ110cm)を使用して展示を統一します。チャリティー販売では、彫刻、立体作品に対応した「ART CUBE」という、統一サイズのアクリルケース(15cm×15cm×15cm)に作品を入れて販売する、立体作品ならではの企画を始めます。従来の彫刻、立体作品のチャリティー販売も行います。

事務局だより

型を変えて繰り返し猛威を振るうコロナウイルス。ウクライナが戦場となり被害が拡大し長引く戦争。日本での出来事？と耳を疑う安倍元首相銃撃の事件。こんな状況下を憂いながら、今、何ができるのか。アートの力は：と考えさせられてしまいます。

二科会では公的支援の持続化給付金(2021年給付)・事業復活支援金(2022年給付)等も得て、皆が元気になるようにと新しい試みを、担当の先生方はアクティブに取り組み、日夜努力されております。106回二科展も「ウイズ・コロナ」にかつと君缶パッジ(古保木会員デザイン)を目印にコロナ感染症対策を致します。

今年三月、長年、二科会事務局の会計担当を務めて来られた安田明長会員が退会されました。スッと天に伸びる作品は「Silent language」。寡黙ながらも誠実で気の置けない仲間の退会は本当に寂しい限りです。

今年五月、長年、会の運営にご尽力下さいました香川猛常務理事

2022春季二科展の展示者数と展示点数

会場：東京都美術館 会期：2022年4月19日～5月2日

Table with 6 columns: Category, Painting (人数/点数), Sculpture (人数/点数), Total Exhibitors, Total Points. Rows include Members, Selected Exhibitors, and Totals.

されました。99歳のお年を感じさせない、柔和で笑顔が素敵な田中理事長のご指導の数々に深く感謝申し上げます。

時代が移り、組織も人も変わっていきますが、変わらず人の心に残っていくものこそ大切で尊いものではないかと強く感じます。

事務局は馬淵会員・日置会員の新体制となりました。多くの会員スタッフの皆様にご協力頂きながら第106回二科展を無事に乗り切りたいと思っております。

事務局長 埴 珠世

編集後記

◆2022春季展が開催され、本誌、春号も3年ぶりの発刊。表紙も2年度分の総理大臣賞、104回

展受賞の深見まさ子会員、105回展受賞の須藤愛子会員の小品と、春季の風景で構成した◆104回展は途中からコロナ禍の影響が深刻になっていった様子、105回展は来場者のマスク姿、近年の状況を思えば各地区の会員のご努力、ご苦勞の上での開催に感謝して、巡回展報告も2年度分

◆本誌、1979年の創刊1号には、当時の吉井淳二

理事長の「社団法人二科会として新しい第一歩を踏み出す機会に機関誌をだすことにした。いわゆる二科ニュースともいうべき：ささやかな体裁ではあるが、発刊できたことを会員諸氏とともに喜びたい」とある。銀座セントラル美術館での春季展開催、総会報告掲載の4頁の第1号以来、開催事業の記録、運営状況の報告を軸に、出品者にも配布の広報的役割も持たせ16Pフルカラーとなった本誌も第78号。今号をもって編集長、編集委員が交代となる。引き続き、田浦常務理事とともに担当役員として協力し、深見新編集長に更なる刷新を委ねる。常に原稿依頼、取材にとご助力頂いた各位に深く感謝を申しあげます。(N)

編集委員会

- 委員長(総) 野村 みそら
委員(総) 田川 絵理
" 尾崎 ゆき子
" 谷口 貞久
(彫) 上田 快

令和四年七月三十日発行
公益社団法人 二科会
〒100-0022
東京都新宿区新宿4-3-15
レイフット新宿 501号室
電話 03(3354)6646
FAX 03(3354)4768